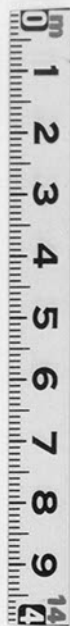


景

月

號 月 八



卷五

三猿文庫

諸藩藏書

|               |      |       |
|---------------|------|-------|
| 微笑と涙(メエタルリンク) | (一)  | 吉江孤雁  |
| 舖石道           | (五)  | 前田夕暮  |
| 夢を刈る人         | (九)  | 室生犀星  |
| 近代文學の使命       | (二)  | 山田橘   |
| 月             | (五)  | 福武鶴二  |
| 所現            | (七)  | 小林武二  |
| 五月            | (一〇) | 磯貝彌   |
| 迷へる心          | (一一) | 小松久   |
| よるこび          | (一二) | 鈴木末造  |
| 蛇の如く          | (一七) | 池上修   |
| 櫻桃の味          | (二〇) | 村田光烈  |
| 花粉の匂ひ         | (三三) | 佐藤ひろし |

|                     |      |       |
|---------------------|------|-------|
| 美少年用歌               | (三七) | 野中源二郎 |
| 雑詠                  | (四〇) | 高田安巳  |
| 夏となりて               | (四二) | 櫻井朱春  |
| 山頂にて                | (四九) | 森花葉   |
| 樹皮白く                | (四九) | 岩井緑汀  |
| 記憶すべき幻想(ウキリアム・ブレイク) | (五〇) | 山村暮鳥  |
| 静物                  | (六〇) | 山村暮鳥  |
| 消息                  | (六〇) | 山村暮鳥  |
| 表紙畫                 |      | 南 薰 造 |
| 古代印度アシアンタ天井畫        |      |       |



## 微笑と涙

(メエテルリンク)

吉江孤雁

我々は、最も小さな事件でも、絶えず純潔に絶えず高尙に進み行く美の形を自づと、執るような世界に住んでゐる。

天と地ぐらゐ容易に溶合するものはない。

諸君が愛する女性を腕に擁く前に、星の上に諸君の視線を注いでゐたならば、その抱擁は諸君が單に諸君の室の壁の上のみを眺めてゐたとは異つた





ものであるに違ひない。

諸君は生の月にある罅隙から射して来る光線をきめてさまよひ歩つた其日、諸君は既に諸君の敵の傷口を縫合してやつたまじ程な大きな事を確かにしてゐるのである。何故なれば諸君はもうその時にあたりては、如何なる敵をも持つてゐないからである。

我々の生命は我々の神を求めるために費されなくてはならぬ。何故なれば神は隠れてゐるからである。けれど神の謀略は、一度知られると、極く單純なもので、微笑してゐるもの、やうに思はれる。それに氣付いた瞬間から、ほんのつまらない物でも神の存在を示顯するのである。そして我々の生命の偉大さはほんの些細な物に依存してゐるのである。

それと全じくある詩人の作は、日常生活のつまらぬ事件の中にあつて、不意に駭く可きある物を我々に示顯する。如何なる壯麗な言葉も發せられ



なつたか。而して我々は何物も呼び醒まされたやうには感じない。然かも何故に、老人の涙の後方から何とも表はし難い人の顔が我々にうなづいて見せるのであらうか。何故に、小兒の微笑の上に、天使の群れる廣漠たる夜が廣がるのか。そして何故に、歌つたり、また他の事件に關係したりする一人の人の囁く「イエス」さか「ノー」さかいふ言葉について、我々は不意に呼吸を滞め、此處に神の宮居がある。此は天へ到る入口の一つである」を考へるのであるか。

それはそれ等の詩人が「無終の物業」に對して我々よりも遙かに注意深かつたが故である。これが優れた詩の要素である。これ、而してこれのみである。而して詩の唯一の目的は「見得る世界より見ゆる世界への大道」をいつも開いてゐる事である。

併しそれがまた人生の最上の目的である。そしてこの目的は最高の詩に



於てよりも人生そのものに於て達する方が遙かに容易である。何となれば詩は沈黙の闇の翼を捨てなければならぬからである。

一日としてつまらない日はない。この考が我々の生命の中に深く沈み、其處に根を張る事も簡便である。悲しまなければならぬといふ事は問題ではない。僅少の悦び、かすかな微笑、そして多くの涙、總て此等は時宜の全じ隅を占めるものである。諸君は「死の床のそば近くある小兒」の如く無邪氣で暮らせる筈である。涙ばかりが無くてならぬものではない。微笑が涙と全じく他界の門を開く。行け、或は來れ、諸君は闇の中で、諸君が必要とするものを總て見出すであらう、併し諸君は決して門の近くに居るといふ事を忘れてはならない。

## 舗石道

前田夕暮

妹といかで思はむ日に焼けし舗石道に行きあひにけり

おもやつれたる女のうちしほれ行くを妹といかでおもはむ





久しくも相見ぬゆゑに兄妹は逃みに顔を見忘  
 れてけり  
 日に焼けし舗石道を行きにけり人の妻なる妹  
 のやつれて  
 ほつかりと熱をふくみし死に風の顔にふれけ  
 り路地を覗けば  
 手あつれば焼けもやせなむ眞夏日の舗石道に



眼をおとしゆく  
 妹が嫁きて二夏いまだろの婿をわしらす家を  
 わしらす  
 つくづくと知らぬ人おほしふるさとの繼母な  
 る人もいまだあはなく  
 繼母を知らず二人の妹の婿を知らずまことに  
 淋しく年は過ぎにけり



この妹やや鈍ければうらぶれて商人の妻にな  
りしあはれさ  
日に焼けど妹はみごもりなりにけりとおもひ  
高き家あふぎけり  
妹の路地の奥なる家おもひ舗石道になみだを  
おとす



# 麥を刈る人

室生犀星

わが麥は空にあり  
さびしき炎となりて  
穂をば垂る。  
鎌は天より光を授け  
さんとして穂をば刈る。





ああ麥刈りにつつ  
わがうたひつつ  
燃わわたる一穂の麥  
ささげささげてわれすすむ  
人の生のをき並木路  
煙にまよふすすめの巢  
いとしがりつつわれすすむ。

## 近代文學の使命

山田 檳 榔



此の頃の新しい文學は解り難いとか、肩が凝るとかいふ非難らしくない非難を屢々一般世人から聞かされる、新しい劇の觀客の中からも同様の嘆聲が洩らされる。それは確かに事實である。歌舞伎劇の夢みるやうな柔かな情調の中に没つて、うつろりする心持などに比べて新しい翻譯劇などを見るに何となく重く、新しい氣分に壓さへ附けられるやうな氣がする。容易に解く事の出来ない或る問題を考へさせられる。況してロシアの陰鬱



な調子の作家の手に成つた戯曲物などになると、陰惨な気分が、深く観衆の層底に喰ひ入らずにはおかぬ。

近代文藝の特徴は實に人生のものを真向に研究し批判し剖析する所に存するのである。形式や技巧の上の遊戯に安んずる悦樂を満して居ないで、端的に人生問題の深奥に突進して、道德問題戀愛問題社會問題生活問題幸福問題等の複雑なる考察を試み、糾糾せる心理活動の解剖分拆をやる所に近代文藝の長所があるのである。單なる遊戯と悦樂との量的豊富が近代文藝の問題ではなくつた。個々の個性、心理作用、道德行為、戀愛活動の質的相異の差別相といふ事が近代文藝に於いてより多く重要な問題となつて居る。事實開展の真相を究明し、自然的過程の中にひそめる真理を探求するといふ事が近代作家の狙ひ所となつて居る。

近代の文藝に於いては急遽な、一時的の間に合はせの解決や、安んずる不



自然的協合を排斥して居る。大自然の中に包蔵された問題のものを問題そのものとして、直ちに讀者の眼前に提供して居る。戀愛問題、道德問題、家庭問題等あらゆる不可解な難問題を問題のままに提供して、讀者の判斷に任じて居る。特に近代の問題藝術に於いてはすべてが無解決藝術である。イブセンの如き正に其の絶好代表である。「人形の家」にしても、「海の夫人」にしても、婦人問題、家庭問題に對する根本的疑問を疑問のままに提出して居る。従來の人が、好い加減にすまして一向問題としなかつた點について原來的疑義を拵んで居る。そこに、躍々として、讀者の心胸に肉迫する力があるのである。トルストイの作品にしても、人生そのものに對して根柢から疑を抱いて、様々な問題を取扱つて居る。「復活」にしても「アンナ・カレニナ」にしても、罪惡と幸福と救済と愛と慈善と其の他難多な問題を、作者自身の問題として、同時に讀者と共通な問題として、作中にまぎまぎと



に織り込んである。三十餘年の平和なヤスナ、ホリヤナの幸福生活を一朝にして振り捨て、謎の如き曠原の死に赴つたトルトスイ自身の生涯が既に一大疑惑のライフに外ならぬ。ドストイェフスキイの作「白痴」「死人の家」等にも不可解な神秘な問題があらゝのまゝに描出されて居る。

之等の近代の文藝に接する事はやがて、吾人の思想内容の質的差別の多種多様を顯致する所以であり、それだけ、偏狹でない單純でない、充實した生活内容を遺諸する所以である。

満足した豚であるよりも食禁飽く事を知らぬ狼でありたい。といふ言葉は、思想上の問題の場合にあてはめて宜しいと思ふ。苟且な解決に噤安を盗まうとする怯懦なる態度は拒否すべきである。吾々はあくまでも、現實の慘憺たる苦闘の渦中に身を投じて、ジエアン、クリストフと共に勇敢な闘争を續けなくてはならぬ。

## 月

福武鶴二



實體は金屬なり  
或はみがきし玉。  
泪にあらず  
眞實なる光。



まぼろしにあらず  
空の金屑。

古びし黄金いんの肌は  
空をきしれり。

## 所現

小林武二



なやましき夕暮の  
うすくこめたる紫色の空に  
きらめく黒耀石のひとみ、  
あゝ匂ふくろかみの  
その香りに





ゆらゆらと  
燃上る肉の戀着。

ふるへる空氣の  
心好きまどわしに、  
酔い痴れて  
ひそかにひろかに  
躍上り、ふるねおのゝく。



# ふるふ若葉

ふかみ行く樹々のみどり、  
かろく風に揺れて  
ふるふ若葉よ。

そらろに君のなつかしや。  
かすかにふるふたましひの  
ため息を日はまぶしくて……



# 五月

磯貝 彌

桐の花ちる……  
 ほつれ髪毛さゆらぎに  
 炎炎もゆる心かも、  
 桐の花ちる……  
 桐の花ちる……



# 迷へる心

小松 久

私の心は何かに迷つて居る、  
 見ることの出来ないものに捕はれてゐる、  
 悲しい霧に包まれて居る。  
 ほのかな酒に酔ふてゐる、



私は眞にふかきを手探り、  
そして目醒める日を怖れてゐる。  
女よ、それはお前の髪の毛の匂ひでもない。



# よろこび

鈴木末造

瑪瑙となりて  
とけばやな。  
乳房となりて  
とけばやな。



月に求婚せむといひ、  
いひぐさとなりて  
とけばやな。

牝牛の角の  
めばねより、  
信仰に出で、  
とけばやな。

真砂の中に



埋れしたましひ、  
そのなきがらの  
わびしみに、  
さわ、さわと  
水はしむ。

こころ

憂は影のしのびね。





啄木鳥は来て朽ちし身をたゝけり。

わがふどころに巢くへ。

鳩に戀心きく、わが君。

# 蛇の如く

池上 修

はつとして我たちのけば青き蛇しほしほとし  
てゆき過ぐるかも

草をゆけばうす青き蛇にゆきあひぬわが全身  
がおののきにけれ





音も立てすくつきりと頭あげにつつかげりた  
る沼に蛇は浮めり  
草冷ねの心なるらむ涙してしばしは空を仰ぎ  
たるかな

太陽に打ちさらされつ青草に寝てあればわが  
身石の如しも

蛇の如く愁ふるこころながながと曇りし空に



欠伸しにけり

蛇の如く、つらく悲しく悠々とこの天地にひろ  
みて死なむ

青き蛇小さなながらも悠々とすぎゆくに心さだ  
かならざり

やみがたき悲しきものにつきあたり蛙いよい  
よ鳴きてやまざり



## 櫻桃の味

村田光烈

うなだれて小野の細徑わが行けごむかしの君  
 につひぐ遇はなく  
 かへりみればわれはもさびしいまさらに二人  
 の親の君さびしかろ



いまさらにかかる思ひのあさましさ捨てなむ  
 として日毎惱めり  
 君あらぬ君が生家をうかがへば姉君のたかく  
 笑ひてあれり  
 君が姉の男に似たるものいひに君は似ぬなり  
 虞美人草の花

×



わが病篤かりし日に賜びにける櫻桃の味忘れ  
かねつも

わが病篤かりしかば櫻桃を君はしのびて送り  
けむかも

熱病める舌に觸れたる櫻桃の味の痛さよわが  
泣きにけれ

思ひ出は嵐の如く熱病める頬ほにぞ吹き捲け櫻



桃食めば

熱病めば半ばは夢の心地にて櫻桃食みき手ぞ  
顔ひつつ





# 花粉の匂ひ

佐藤ひろし

別れけり硝子戸ごしに物浮かぬ顔がこちむき  
ほのに動きし

道つきて杜ありいざや静けさに心置きなく物  
をおもはむ



しんとして緑うよがすわが心ひとつ離れてさ  
しぐめるかな

君おもふ心に草の香の泌みてやるせなげるに  
も吸ふ煙草かな

指につく花粉の匂ひも寂しけれ遠き人をばお  
もふたうがれ

しつとりと夜露にぬれし樹によりて物を思は



涙ながれむ

夕ざればかなく、啼けば何となく戀しさま  
る身をいかにせむ

故郷の姉さびしくも老ひますや日の暮がたに  
芥子の花散る

もの疲れ塵に黄ばめる路傍みちのへの草の葉を見る午  
後のけだるさ

## 美少年弔歌

野中線二郎

橋本齊死せり

雨ひと夜ひと時強く降りにけりあはれ悲しや  
彼れ死ににけり

美少年かゝる月にぞ死ににけるしらせ見むと





てしのび行きたれ

吾妻山雨ふかゝと包み居て我等揭示を見つ  
くしにけり

なげけとて此の夜青葉に降りしきる雨しづ心  
なししづ心なし(以上福島にて)

×

せはしくも人に逢ひたれ頭上にはあまたいう



いそ人働けり(野雨に逢ふ)

いのちある人等なりければしみゝとかたり  
もがする日にてありける

逢ひにける人は眼鏡めがねをかけゐたり茶の粉沈む  
と見守りにけり



# 雑詠

高田安巳

あかるみをさして這ふ蟲青き蟲わがこのごろ  
の心が病めり

×

八月は人妻ゆへに一りんのだりやもかなしわ



が眼に悲し

戀ひぬれば身うちの血しほだくだくとながれ  
やまざり太陽を見る





# 夏となりて……

櫻井朱春

故里の家になれつつすぎし身にはや八月と空  
の青める

朝起きて庭にたたずむひとときもこの身は海  
を戀ふるなりけり



とらわれしこの身と思ひかなしくもダリヤの  
前に眼をどちにける

かにかくに埋れ果てしこの心泪にひたりひた  
りてありけり

山山の青みたるにもしたします我が身ひとつ  
の埋れゆくも

わが脊より伸びたる黒のダリヤころ夏の陽を



吸ひ吸ひもやまざる

ま裸となりては庭の艸むしるこの身にいとし  
眞夏日の陽は

艸中にわが見出でたる小蜥蜴の瞳のいろの忘  
れがたかり

# 山頂にて

森 花 葉

山にゐて叫べる聲は碧玉の飛ぶがごごしも空  
に逃げけり

叫びつゝ澤を歩めば木魂らは峰より峰にはし  
るなりけり





蒼空を胸いつばいに呼吸してわれ山頂の人となりけり

山頂のわが居るところ青々と残れり雲はむらがりにけり

山頂に物な語りうすくすくと四方の雲に運びとられむ

山頂にぬれば蒼々かぎりなしこゝろのはてを

落つる日のあり

とつぷりと日は暮れにけり山頂に立ちてつらつら神をおもへり

大雨を澤にくだせばけだものゝ吼ゆるがごとく鳴りどゞろけり

ばたばたと雲雀は空をかけめぐりわが胸上を啼きて離れず





祈るべきものなかりけり落日と別かれしづか  
にわれのありけり  
わがこころ悲しみやます總てをば棄ててしづ  
かに山を歩めり



# 樹皮白く

岩井綠汀

沼のほとり樹影はあをく漾へり曉の月白かり  
しかも

あかどきの月ほの白くかげりたり沼のべの樹  
を揺すりたりけり





進むべきわが第一歩のかなしさよ樹蔭のひる  
の古き街道

沼の水の青くしづめる夕闇に花のゆらげり古  
き街道

静かなる沼のみぎはの若さくらさぶしく立て  
り樹皮じぶひ白うして

## 向日葵の花

一鉢の蒼鐵の葉並つけつけといのちさすなり  
思考の前に

赤く白く霧かかり見ゆ樹の蔭のみぎりのうば  
の二もとだりあ

わが白き手は夏草をつみとれば山萩の葉は陽





に燃やます

吾妹子はみやこゆゑに乗りたれば白き手足  
をなげかひにけり

わが友の眼鏡の顔の眼鏡ごしおもひうかべつ  
夏の雨降る

一束の線香花火をあたふれば泣きやみがてに  
吾を見いる甥



全身をよろこびのままうち寄する甥をいだけ  
り向日葵の花

### 筆蘭

日に焼くる草いきれこりかなしけれ見よ筆蘭  
はさ紫なり

筆蘭のうすむらさきにすくと咲きべつたりと



なるまでのかなしき

# 寫眞

月下氷人は寫眞三枚もち來たり思ふ存分見る  
がさみしき

かなしさよ凝視めてあれば君に似るわが月下  
氷人の寫眞の女



凝視むればみつむるほごに君に似てくるがさ  
みしき妻となる娘の

みつむればまさしくきみに彷彿たりわが妻と  
なる娘のさみしさよ

×

樹皮こ白く闇のおもてにけふりたり力のかぎり  
揺すらるる柿



夕闇に樹を揺すぶれば樹皮のみぞ樹皮のみぞ  
白し君をおもはず

丘黙しわれ黙しつる公園の櫻樹よすべてしづ  
かならまし

岩や石沼のほとりの簾窪に墜ちて音なしのぞ  
けば白く

足跡のいかにますぐにつづくらむ闇にも著き

砂の古路ふるみち

沼のほとり白き花さへゆらがざりわれの歩行  
の何ぞはかなき

青き實をつくる葉かげに白う浮く闇にも著き  
柿の樹皮かな







## 記憶すべき幻想 (ウキリアム・ブレーク)

山村暮鳥

天使らが苦痛と見、狂氣とみる天才の歡喜に酔ふて、地獄の火の中を彷徨ひつつ、私は、それに依て、その住民の格の知られる言葉から彼等のこさわざを拾ひました。地獄のこさわざであります。それは記録や建築や服裝などよりもよくその土地の智識を示すのでした。

私が家にたどりついた時、腹部の平い斷崖が現在の世界の上へ陰鬱に覆



ひかぶさつた所の五つの感覚の深淵の上に、巖石のあたりを漂ふ黒き妖雲を身にひき纏ふて佇める一の巨大な悪魔をみました。焼き滅すべき炎をもつて、悪魔は、以下の文字を認めました。それは人類の心にて悟り得、また、地上のその人類に讀まれ得るものでありました。

"How do you know but every bird that cuts the airy way

Is an immense world of delight, closed by your senses five?"



# 静物

山村暮鳥

このみは上にあり、  
しろがねの指さきに  
うれて悲しみ、  
(女は眞裸)  
このみの炎



# 相

その指さきに形をなし  
瞳をたゞよひ、  
(女は足掻せり)  
さんとして光の聖餐、  
金屬の香氣を發す。

右の手には紅に燃ゆる林檎



左の手には雪よりも白き兎、  
たれにとて捧ぐるもの、  
われ天上巡禮の  
鉦をば胸にかけたれ。

## 消 息

石を上げよ、うにに現實がある。

七月號を休刊したので、諸方から色々の質問に接したが、それはとりわけての理由があつたのでは無い。こうした事業の常である維持困難が更に、高く美しく飛ばんとする前提として、しばし翼をおさめて一息呼吸したまでのこと。——青い空が、さうして忘れられやう。

約束を改めて同人組織となし、その作物以外のものは掲載せぬことにした。同人は寄稿無制限。そして社費は毎月一圓以上（カワセにて）を納めなければならぬ。かうして「風景」は益、結晶し、發光するのである。

大きな酒蔵家を二人も同人の中にもつてゐる我等、その白壁の酒蔵の酒のかほりを想ふに、若きころは湧き、わき、湧く。

——時も眞夏。

さり換えた本號のカット及び裏繪は、畫報社の厚意を以て、その「印度藝術號」所載のものより、製版したのである。

かのアジヤンタの壁畫は多く剝落して残存せるもの稀なれど、その天井畫のみは今尙鮮かにありし往古を語るさか、使用せるものは即ちそれである。さころが飛んでもない間違ひが生じたのは製版出來の上、發見した。悔ひても歸らない。苦心慘憺、鎚や鑿でさうにかこうにか形にはなつたが、それがため折角の玉を傷にした。畫報社に謝す。

毎月、寄贈される新刊書に就て、批評どころか氣のきいた紹介を一行書かないであるのは、著者に對して

甚だ失禮である。失禮は知つてゐる。しかし書かないのではない、眞摯に考えるを書けないのである。そのうち、もし出来るなら、レミイ・ド・グルモンの「假面」のやうなものを現代の詩人と詩集とに於て、描いて見やうかと思つては、想ふ。

佛蘭西の島崎先生からおたよりがあつた。その一節に「何か書いて送れさのお申越しではありますと言葉もまだ自由にならぬ旅のものに、そんなに書けといふことを殘酷だとは思つて下さいますまいか」と。なるほど、それもさうである。

わたしは室生犀生、萩原朔太郎と三人で人魚詩社といふ結社をした。何でも詩は勿論、音楽と宗教なども研究するのだとやら、此處からどんな風が吹くであらう。

さすがに熱い。前庭をみれば草木も花もみんな言ひあはせなやうにほれた。そのなかで、ゴッホの聯想される日向葵ばかりは、人間さものの仰き見得ざる太陽を一心に凝視してゐる、合掌禮拜！

おい。風呂はまだ沸かないか。夕立が来た。

新詩研究社にて、 暮 鳥 生



## 同人

|       |       |      |
|-------|-------|------|
| 岩井緑汀  | 村田光烈  | 松本徳一 |
| 池上修   | 福武鶴二  | 松崎憲司 |
| 鈴木末造  | 櫻井朱春  | 早坂掬紫 |
| 小宅銀二郎 | 香原一勢  |      |
| 八代義定  | 高田安巳  | 山村暮鳥 |
| 佐藤博   | 小松久三郎 |      |
| 野中線二郎 | 磯貝彌   |      |
| 森花葉   | 小林武二  |      |
| 佐々木順  | 酒井敏雄  |      |



■ 詩歌八月號 ■

容 內

|      |      |      |       |       |       |                |                |       |       |       |       |       |       |       |       |        |       |       |
|------|------|------|-------|-------|-------|----------------|----------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|
| 壺    | 妙    | 月    | 死     | す     | 街     | 『世界の一人』を讀む(批評) | 『太陽の子』の著者へ(批評) | 七月の歌  | 歌壇一時  | 愛五    | 麥     | 日暮    | 教員    | 青     | 夏     | 干      | 山     | 向     |
| 清寺新  | のの   | のの   | のの    | ごろ    | 上砂    | 塵感想)           | 壇批評            | X     | 評批評   | 人一首研究 | 誦     | 近き    | 卑下の   | 木     | の     | の      | の小    | 葵     |
| (長詩) | 居長詩) | 誦長詩) | 歌長詩)  | く小説   | 尾山篤二郎 | 西宮藤朝           | 室生犀星           | X     | 前田夕暮  | 齋藤茂吉  | 吉井勇   | 佐藤嘲花  | 田中白夜  | 都會詩人  | 小野深雪  | 佐々木順   | 村田光烈  | 米田雄郎  |
| 山村暮鳥 | 室生犀星 | 白鳥省吾 | 福士幸次郎 | 一宮榮譯  | 室生犀星  | 室生犀星           | 室生犀星           | Y     | Z     | 前田夕暮  | 齋藤茂吉  | 吉井勇   | 田中白夜  | 都會詩人  | 小野深雪  | 佐々木順   | 村田光烈  | 米田雄郎  |
| 島短歌) | 山短歌) | 室短歌) | 白鳥短歌) | 福士短歌) | 一宮短歌) | 尾山短歌)          | 西宮短歌)          | 室生短歌) | 前田短歌) | 齋藤短歌) | 吉井短歌) | 佐藤短歌) | 田中短歌) | 都會短歌) | 小野短歌) | 佐々木短歌) | 村田短歌) | 米田短歌) |

□錢五拾貳金價定□

社日白

發行所 東京市外 西大久保 振替口座東京二六六三番  
白目社

集募友社

白 日 社  
清 規 往  
復 葉 書  
に て 申  
込 ま れ  
た し

堂京東

東京堂 東京神田表神保町 發賣所  
振替口座東京二七〇番

未 來 寄 世 界 の 一 人

白鳥省吾氏著

東京堂發賣

寄贈新刊

東京堂發賣

東雲堂發行

第三帝國  
詩歌  
水甕  
假面  
青鞵  
アララギ  
蛇の舌  
近代思想  
創作  
自畫像  
現代詩文  
秀才文壇

銀 浦 海 足 蘇 川 と アマチュア 蛇 郷 眞 藝  
 磬 峽 蹟 鐵 紅 ら び 苺 文 土 珠 術

途裸明一木槇太陽築河茨潮  
上體星隅實の園鹿論流  
ひやしやす

前田夕暮氏序文 服部嘉香氏序歌  
山村暮鳥氏序詩 富田碎花氏序文  
白鳥省吾氏序文 原阿佐緒氏序歌  
熊谷武雄氏序歌 早坂掬紫氏裝幀

岩井綠汀氏著 (シャルル叢書第一編)

# 歌集 紺青の夜

▲ 四六判三百頁歌四百首紺青と金と白の表紙裝幀  
定價金六拾五錢……送費金六錢

「綠汀氏が紺青の夜の室に病めること約壹年、再び健康な日に復つて、太陽を打ち仰ぐことの出来た歡喜を紀念すべく出版せられたのが本書である。水仙の冷たさと、しなやかさと、清らかさと明るさを以てゐる氏の歌はまことに愛すべきである。詩歌「評」。

## ■ 内 容 ■

黄 涙 録  
月 光 と 雪  
乳 緑 の 心  
悲 し き 春  
愁 夜 曲  
銀 緑 の 光

社 行 發 所 仙臺市外町一六二 シヤルル社

堂 雲 東 町物檜區橋本市京東 元 賣 發

堂 華 英 木 鈴 目丁五町大市臺仙 所 捌 賣

## 銘 酒

# 勿來正宗

さかづきあまたならべて  
いづれをうれと嘆かむ  
嘲酒するこころの  
せんやわれも酔ひぬる。

白秋氏酒の徴より

福島縣石城郡平窪村

醸造元 松本徳一

全 平町南町

第一支店



著舟柴上尾

# 白き路

九月月上旬發行  
三六版頗美本  
社友に限り二割引  
定價七拾錢  
郵税六錢

發行所  
東京市本郷區  
元富土町  
有朋館

發行 一日 每月一回

## 甕水

■ 目 要 號 月 八 ■

|                    |           |
|--------------------|-----------|
| 表紙畫                | 長谷川 湊     |
| バーヤード・ショウ氏の將來 (翻譯) | 近 藤 哲 年   |
| 夏草の山より海へ (歌)       | 矢 逸 天     |
| 夏を趁ふ (詩)           | 園 野 見 義 亮 |
| シモンズ三章 (歌)         | 森 矢 天 淚   |
| 青き焰                |           |
| 短歌                 |           |
| 長岡とみ子              | 山 本 渚 村   |
| 佐々木 元              | 東 江 谿 村   |
| 小泉 藤三              | 水 谷 流 助   |
| 堀江 裕二              | 藤 田 豪 之   |
| 羽田 齋 微             |           |
| 伊藤 藤 紫             |           |
| 柳 上下 雪             |           |
| 井 柳 伊 藤 雪          |           |
| 諾威印象記 (翻譯)         |           |
| 解の葉                | 岩 谷 莫 哀   |
| 旅にて (歌)            | 安 永 子     |
| 破れたる花瓶 (詩)         | 東 溝 濤 太郎  |
| 破れたる花瓶 (詩)         | 中 氣 新 郎   |
| 軍隊靴の神 (歌)          | 尾 和 上 柴 舟 |
| めだか                |           |

(中錢壹稅郵) ■ 集 募 友 社 ■ (錢五廿價定)

|              |              |
|--------------|--------------|
| 所 費 發        | 所 行 發        |
| 九十目丁壹町錦區田神京東 | 六十六百保久大西外市京東 |
| 館 興 中        | 社 甕 水        |

# 蛇の舌

□ 八月號 内容

|             |               |
|-------------|---------------|
| 表紙畫         | 齋 藤 佳 三       |
| シルエストルボナルの罪 | アナトオル フランス    |
| たほしさま       | 瀧 村 立 太 郎     |
| 花咲く葡萄       | アル フォン ストード エ |
| カレエムの戀      | 岡 野 野 郎       |
| カコホニイ       | 安 藤 辰 子       |
| カコホニイ       | 友 田 二 郎       |
| 山岳讚美論 葉書より  |               |
| □ かばやき      | 知 三 十         |
| □ 表紙繪に就て    | 龍 佳 三         |
| □ 八千代子に     | 甘 三 十         |
| □ 山岳讚美論     | 葉書より          |
| □ おわいと      | すけもと          |
| □ 戀情 觴杯     | 二 郎           |
| □ ありのまゝ     | かをる           |
| □ 消息 其他     |               |

|     |         |          |         |     |
|-----|---------|----------|---------|-----|
| 送 料 | 社 舌 の 蛇 | 一十八岸根上谷下 | 所 行 發   | 定 價 |
| 一 錢 | 社 北 南   | 四十町寺通區込牛 | 所 所 賣 發 | 貳拾錢 |
|     |         | 四九一京東替振  |         |     |

□—よせ讀一を號月八にみ試—□

# 現代詩文

—號八第年二第—

□號月八□

## 詩論

服部嘉香

■内容充實——眞に詩壇の最高權威たり■

## 詩話

三木露風

■誌面擴張——本號より菊判百頁に擴大■

□生命(詩) 山宮 允  
□批評に就て 尾山 篤二郎  
□やみのあめ(歌) 嵯峨 秋子  
□幹(詩) 高辻 秀宣  
□窓を開け(詩) 阪本 潮郎  
□燈影(歌) 長瀬 虎朗  
□白き雨(歌) 並樹 秋人

會友募集  
本會の詩文添削は已に定評がある文壇的生活に入らんとする者には祝福多き詩の機案「現代詩文」は自由を開放してある。今同紙面擴張を機とし、永契の同志を募る。詳細會則は郵券三錢を添へ現代詩文社宛て申込の事。

卓 (カンチンスキー)……  
アンダセン逸話二三……  
ヴェルレーヌ寸評(フアンソール)……  
灰野庄平  
蘆谷重常  
柳澤健

現代詩文社特定原稿紙、半紙判二十字詰二十行百枚金拾五錢送料金八錢。同じく書簡箋半紙判十枚一狀金拾四錢、送料金四錢。何れも罫線、紙質、印刷に最善の吟味を施し、好評噴々である。註文は前金の事。

□明暗の命(歌) 中村 秋津  
□垂乳根の慈母(歌) 篠田 天水  
□青草の風(歌) 谷元 知安  
□燃ゆる木立(歌) 飯島 幸夫  
□有象無象に與ふ 中川 一政  
□詩歌 其他數百氏

用紙  
現代詩文社特定原稿紙、半紙判二十字詰二十行百枚金拾五錢送料金八錢。同じく書簡箋半紙判十枚一狀金拾四錢、送料金四錢。何れも罫線、紙質、印刷に最善の吟味を施し、好評噴々である。註文は前金の事。

改正定價貳拾五錢・送料一錢五厘

東京代木山一〇三 東京代木山一〇三 東京代木山一〇三  
東京代木山一〇三 東京代木山一〇三 東京代木山一〇三  
東京代木山一〇三 東京代木山一〇三 東京代木山一〇三

□—れ送枚八十手切厘五錢壹—□

八月號 毎月一回一日發行

■壹冊定價金拾五錢 郵税壹錢  
■本誌に關する一切の用件は新詩研究社宛の事  
大正三年七月廿八日印刷  
大正三年八月一日發行

(載轉禁)

發行人 福島縣平町字二丁目廿九番地 關内彦太郎  
印刷者 福島縣平町字紺屋町廿五番地 根本吉太郎  
印刷所 福島縣平町字紺屋町廿五番地 大正活版所  
發行所 福島縣平町字二丁目廿九番地 清光堂  
發賣所 東京市神田區表神保町 東京堂  
振替口座東京二七〇番

編輯所 新詩研究社

福島縣平町振替小路



